

【研究ノート】

製図に描かれない服飾造形の研究 II

－レースの縫製テクニック－

Fashion Creation Implicit in Patterns: Creation Technique of Lace

安部 智子

ABE, Tomoko

I はじめに

服飾造形作品を制作する過程に置いて、テクニックは素材・パターンなどと深く関係し、服飾造形の中核部分を成していることは、前報「製図に描かれない服飾造形の研究」¹でも報告を行った。さらに、より高度なクチュールテクニックを習得することは、制作者のイメージを、具体的に作品として表現するためには必要不可欠であると考え。そして様々なテクニックとパターン・素材との関わりについて研究することは、今後も研究を続けていきたいテーマの一つである。

本報告は、クチュールテクニックを研究・試作し、さらに習得したテクニックをどのように服飾造形の創作に活用し、制作者のイメージを作品として表現するのかを、具体的に実物制作の過程を通して考察するものであり、特に、現代のファッションにおける有用性・汎用性を考慮し、レースに焦点を当て、レースとパターンメイキング、縫製とその表現の関係を実物制作の過程を通して論考するものである。

II レースについて

レースについては、『新・田中千代服飾辞典』を参照すれば、その概要は以下のようにまとめられる。

レースは一般に糸を捻り合わせたり、組み合わせたりして、網状の透かし模様により作られた布をさす。針、ボビンあるいは編み棒なども用い、手によって作られる物と、機械によってつくられる物とある。広義には布に透かし模様を施したエンブroidリー・レースも含む。

レースの歴史は極めて古く、紀元前1600～1500ごろ

すでにエジプトにおいてドロン・ワークの一種で、幾何学的な模様の縁かがりが施されていた。今日的なレースが最初に現れたのは、16世紀のイタリア ヴェニスと言われている。最初イタリアにおいては、網目の部分と模様の部分と一緒に編まれる手針レースであった。この方法は1670年頃まで行われ、その後はボビンを用い、網目と模様を別々に編み、それらを合わせて一つのレースとする方法がとられた。ネーデルランド（ベルギー、オランダ）では、最初からこの方法が用いられ、そのため、手針レース（needle lace, dentelle à l' aiguille）はイタリアに起こり、ボビンレース（bobbin lace, dentelle aux fuseaux）は、ネーデルランドで起こったとする説もある。特にフランスにおいては、ルイ14世の時代にレース産業が奨励され、イタリアレースを制圧するまでに発展した。

レースは、その繊細さや豪華な印象と、製作工程の精巧さのため制作に時間がかかり、長い間非常に高価であった。しかし現在では機械の改良により、安価な価格のレースも市場に出回っている。

レースの種類は大別して、手編レース（ニードルポイントレース、ボビン・レースなど）と、機械レース（リバーレース、エンブroidリーレース、ラッセルレース、トーションレース、チュールレースなど）にわけられる。

名称は、生産地・製作方法・素材・幅・技法などにより、多種に分かれる。また手編みレースは、機械レースが盛んな時でも、中世の修道院では奉仕的な仕事として編まれていた。

Ⅲ レースの縫製方法

1. 柄おこし

さて、レース素材は、透けて柄が浮き出てくる事に美しさの魅力がある素材である。土台となる基布の部分がチュールなど透けるものでできているため、密度が粗く、一般的な布帛のような方法（特にミシンでの縫製）で縫製する事が難しい。そのレースの特性を生かすのが、「柄おこし」というテクニックである。一般的に、クチュールテクニックを用いて製作する場合は、「柄おこし」²という手作業による縫製方法を用いることが多いのもそのためである。この「柄おこし」の目的として、次の2点が挙げられよう。

- ・縫い目の縫い代が重なり、その部分だけの色が濃くなることを避ける
- ・切替線やダーツなどの縫い目を“線”として意識させない。

しかし柄おこしの作業は非常に細かく、手間と時間がかかり、また高度な技術を必要とするテクニックのひとつであるため、近年安価な商品などでは、柄おこしの手法を用いずに縫製されている商品も数多く見受けられる。

2. 作品制作・経過

柄おこしのテクニックを用いて、製作者のイメージを作品として表現するために、以下のような手順で実物作品の制作をおこなった。

なお制作には、Siéqel & Stockman 社、Buste “Femme” type 50459サイズ38 (B83cm W62cm H90cm) のボディを用いた。

1) レース生地を選定

デザイン考案を行う上で、使用するレースの選定が大きくデザインに影響するため、まず第1にレース生地を選定から行った。

現代の服飾造形において、レース素材はフォーマルウェアからカジュアルウェアまで様々なシーンで利用されている。富樫慧子氏の「レースの美学」によると次のように記述されている。

レースの形式上の特質は、“弱さ” “繊細さ” “脆さ” を表現することになる。“レースのような” とか、“lacy” といった形容は一般にそうした印象を意味する。

露骨さを否定し、それを押さえた“曖昧の美”は、慎ましやかさでもあり、一方“上品、気品”の要素でもある。それはレースの単色という統一された表現性によっていっそう強められる。またデコルテや

頭髮や袖口をレースで覆うことは、その慎ましやかさによって深窓の女性であることを意味すると同時に、その中間的手法によって、洗練された印象をも与えるであろう。しかし、レースは同時に、“コケティッシュ”をも表現する。不均一な透かしの効果を持つレースは、肌を覆いはするが、他方では見せもする。

レースの持つ雰囲気は、繊細さ・華やかさ・優雅さだけでなく、清楚でありながら、相対するコケティッシュな要素など様々な雰囲気を演出するのに適した素材である。その様な複雑な要素を持つレースを用いて、落ち着いた華やかさの中に、女性らしい魅力を表現した作品の制作を試みた。

レースを選定する上の条件として、

- ・クチュールテクニックである「柄おこし」での縫製が可能であること。
- ・制作者のレースイメージである「繊細・優雅、清楚でありながらコケティッシュ」なイメージを保有する。

という条件を十分に考慮してレースを探した結果、図1のレース（フランス製チュールレース 幅22cm、長さ3.9m）を選定した。

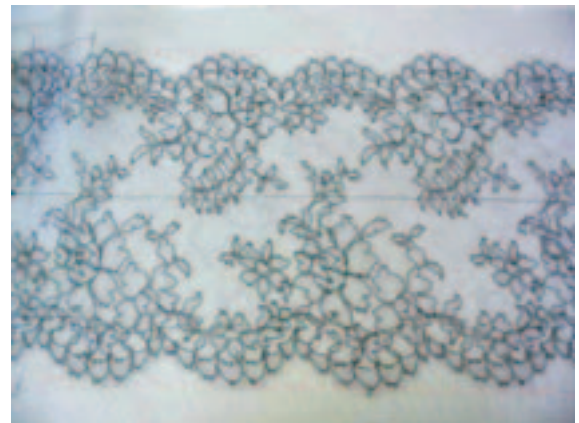


図1 選定したレース生地

2) デザイン考案

デザイン考案のための条件を整理すると下記のようなになる。

- ・レースが持つイメージ：繊細 優雅 清楚だがコケティッシュ
- ・レースの形状：幅22cm、長さ3.9m 細長い帯状である
- ・レースの色：青みがかったグレー
- ・できるだけレースを切り刻まずに、全身にレースを使用したい
- ・「柄おこし」での縫製が可能である

以上の条件を考慮し、デザイン考案をおこなった結果、下記の2点のデザインで比較検討を行った。



デザイン A

デザイン B

デザイン A：レースを縦方向にパネル状に配置し、スカートの部分はレースの幅にあわせて大胆なスリットをいれたカクテルドレス→条件をほぼ網羅している。特に身体のラインに沿った、曲線での柄おこしのテクニックを習得する事ができる。レースの幅が22cmと細いため、レースを縦方向に配置するため裾幅が限られ、ややボリューム感に欠けるため、おとなしい印象を与える。

デザイン B：レースを横方向にティアード状に配置したレースのブラウスとマーメイドシルエットのスカートの組み合わせによるカクテルドレス→レースを横方向に使うためトップにボリューム感があり、華やかなイメージを演出できる。しかし、レースが直線的な配置であるため、柄おこしのテクニックが直線的な物に限られる。

比較検討した結果、デザイン Aの方が制作者のイメージにより合うと考え、修正を加え決定した。

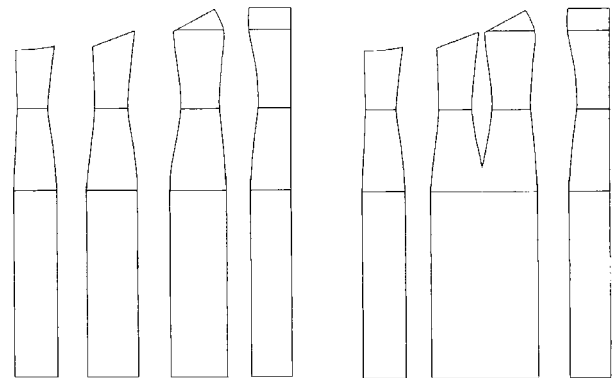
3) パターン考案

パターン考案のための条件

- レースを縦方向に配置するため、縦方向の切替線を利用する。
- 身体の曲線にできるだけ沿わせる。
- レースは切り刻まずに使用する→レースの幅、長さから、前後中心、脇を輪にした4枚パネルが適している。
- レースから縫い目が透けて見えてしまうため、アンダードレスの切替線はレースと同じ位置にいれる必要がある

上記の条件を検討すると、条件 a, b, d はレース生地と布帛生地パターンとしての違いはない。一般的にこのようなシルエットの場合、パターン 1 を用い、明きは後ろ中心線とする。しかし、条件 c 生地をで

きるだけ切らずに使用するという条件をクリアするためには、パターン 2 のように前後中心を“わ”で裁断し、脇線を縫い目ではなくダーツとして処理し、明きは左後ろの切替線につくる必要がある。



パターン 1

パターン 2

トワルによる比較

パターンの違いがシルエットに与える影響を、トワルを製作し、比較を行った。パターン 1 (図 2) とパターン 2 (図 3) を視覚的に検討した結果、顕著な違いは認められなかった。その事により、パターン 2 を使用して制作を行っても、制作者のイメージ通りのシルエットがえられる事を確認した。

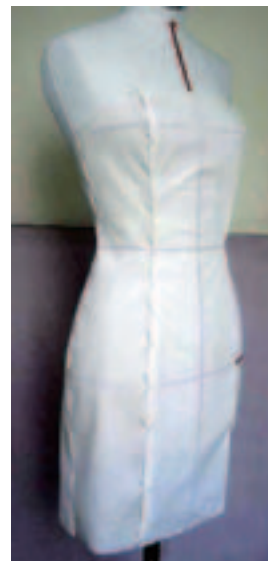


図 2 パターン 1



図 3 パターン 2

4) 縫製方法の選定

現在では、レース生地は機械の改良により非常に高級な物から安価な物まで容易に手に入れる事ができるようになった。そのためレース生地は高級クチュールブランドだけでなく、安価な商品にも豊富に使用されている。

その縫製方法を調査すると、レースの種類にもよるが、高級クチュールブランドは「柄おこし」による縫

製を行っている場合が多く見られる。「柄おこし」のテクニックの特徴としては以下の事があげられる。

- ・レース柄に沿って接ぎ織を決めるため、接ぎ線が目立たない
- ・縫い代はほとんど不要
- ・手縫いによる作業なので、制作しながら調整が可能
- ・非常に細かい作業であるため時間がかかる

今回の研究目的であるレースの縫製テクニックとしては、この「柄おこし」のテクニックが適切であると考え、この手法での制作を選定した。

参考までに、比較的安価な価格の商品の縫製方法として、多くはレースをミシンで縫製するという方法をとっている。ワンピースなどの場合、レースと同じ形に裁断されたアンダードレスをレースの裏打ちのように合わせ、一緒にミシンで縫製している。(図4)

この縫製方法の特徴としては

- ・レースの基布の密度の粗さを補い、ミシンで容易に縫製をする事ができる。
- ・レース生地とアンダードレスの生地が一体化するため、レース生地の特徴である「透け感」がなくなってしまう。
- ・レースとアンダードレスとの陰影がなく、平坦な一枚の布の様な印象を与える。
- ・縫い目が直線であるため、レースの柄を壊してしまう。

この縫製方法は、特別なテクニックを必要とせず、人件費の削減にもなるが、レースの繊細な雰囲気を損ねる懸念があると思われる。使用する素材、デザインによっては十分な考慮が必要と思われる。

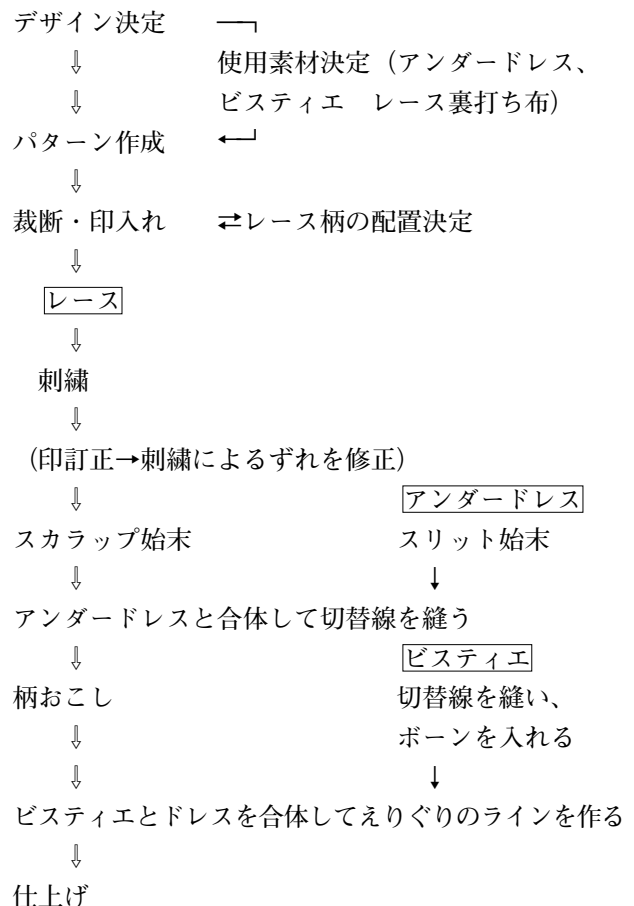


図4 レース縫製例

5) 縫製

作業手順

今回の作品を制作するにあたり、下記の手順で縫製を行った。



① レース生地以外の素材の選定

・アンダードレス

アンダードレスの色は、レースの柄を浮きたたせ、ドレスの雰囲気を決定するために重要なポイントである。レースの色が、青みがかったグレーであるため、寂しい印象にならないよう、明るめのベージュ、ピンク、ゴールド、薄紫などの色を候補として比較をおこなった結果、レース生地のもつ繊細な雰囲気を損なわず、華やかでコケティッシュな印象をあたえるピンク系を候補とし、実際に生地レースを重ね、検討を行った。実際に使用する生地は、甘いイメージになりすぎないようにサーモンピンク色を選んだ。

また、アンダードレスの素材は、レース生地が薄く透明感があり、軽やかで柔らかであるため、その雰囲気を生かすような風合いの素材を考慮した。そ

の結果、柔らかで透け感があるシルクモスリンサテンを選択した。シルクモスリンサテンは縹子織りであるため、シルクモスリンよりも地厚で、生地には厚みと光沢があり、シルクモスリンほど透けない。さらに色に深みを持たせるため、シルクモスリンサテンを二重にして縫製し、色合いや透け感にニュアンスを持たせるようにした。

・ビスティエ

ドレスに使用する生地であるレースとシルクモスリンサテンは、両方とも透ける生地であるため、着用したときにビスティエが透けてその部分の色だけが濃くなり、全体の透け感に差ができることを避けるため、肌にごく近い色のページのオーガンジーを用い、強度を持たせるため二重にして制作した。

・レース裏打ち布

レースを縫製する場合、レース生地一枚だけで仕上げることも可能である。今回レース生地に刺繍を施すため、シルクオーガンジーを裏打ち布として使用した。シルクオーガンジーはシフォンジョーゼットなどと比較すると透明感があり、比較の変形しにくく、しなやかな張りが特徴である。その特性を生かし、パネル状のスカート部分に張りを持たせるためにも、スモーキーグレーのシルクオーガンジーを裏打ち布として使用した。スモーキーグレーを使用した事で、レースの色とアンダードレスのサーモンピンクとが調和し、全体の色彩のバランスが、落ち着いた深みのある雰囲気を得る事ができた。

②縫製手順・方法

i 柄の配置決定・裁断・印入れ

レース生地を裁断する前に、切替線の柄おこしを行った時に柄のつながりが不自然にならないよう、柄の配置を十分考慮する必要がある。(図5、6) レース生地は、基本的にレース柄にそって裁断を行う。レースのモチーフは、レース柄が不足した場合など柄作りに使用するため、できる限り柄を切断しないように裁断を行う。印入れは、レース生地、レース裏打ち布(オーガンジー)、アンダードレス(シルクモスリンサテン)ともすべて別々に細番手の糸を使用して通ししついで行う。

ii レース刺繍手順

今回の刺繍は、フランスアート刺繍³のテクニクを用いて、以下の手順で刺繍を行った。

・レース生地とレース裏打ち布のタテ地ヨコ地を



図5 柄の位置を検討



図6 柄のつながりを検討

正確に合わせ、2枚の生地をなじませるように重ね合わせる。

- ・さらに裏打ち布側にシーチングのタテ地ヨコ地と正確に重ねあわせ、レース生地がたるまないように注意しながら、レースとレース裏打ち布の外回りをシーチングに仮止めする。
- ・刺繍木杵にシーチングを張る。
- ・レースとレース裏打ち布がたるまないように調整し、外回りをシーチングに止めつける。
- ・刺繍をする部分のシーチングを切り抜き、刺繍を行う。
- ・刺繍終了後パターンを合わせ、ずれが生じた場合は、印を訂正する。

刺繍は、材料に日本刺繍糸、シルクステッチ糸、羽二重糸、銀糸を用いて、アンダードレスの色を濃淡で用いて行った。

iii スカラップ始末

パネル状のスカート部分のスカラップを、ドレスを組み立てる前に始末する。

- ①レースと裏打ちのオーガンジーがずれないように仮止めをする。(図7)

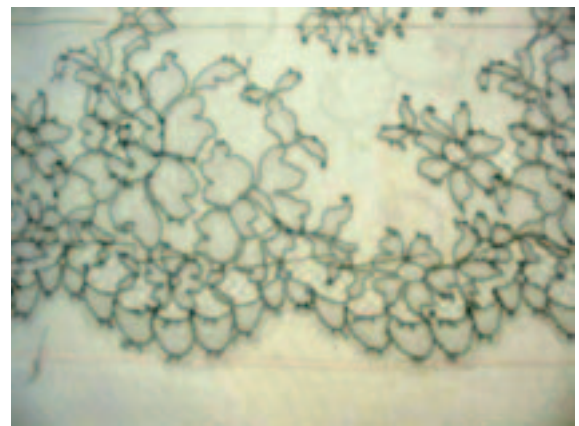


図7 レースを仮止め

- ②スカラップに合わせて裏打ちのオーガンジーをカットする。(図8 9 10)
- ③オーガンジーをスカラップの端より控えてアイロンで折る。(写真11) 控え量はレースの透け具合によって加減する。

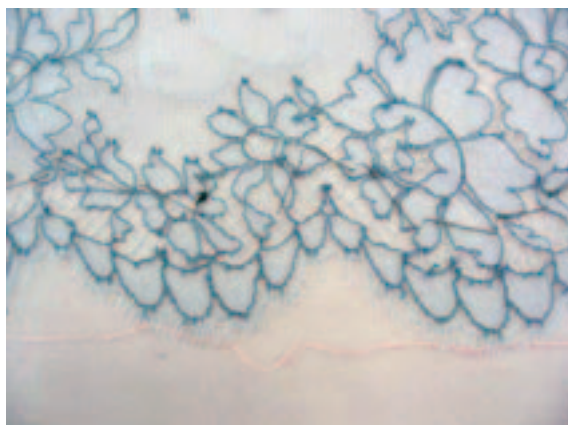


図8 スカラップの位置を確認

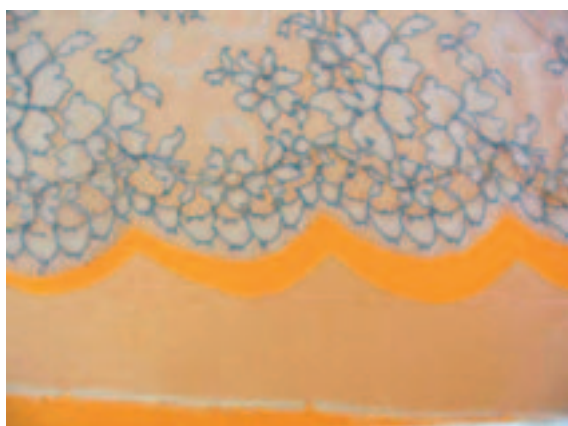


図9 スカラップにあわせオーガンジーをカット

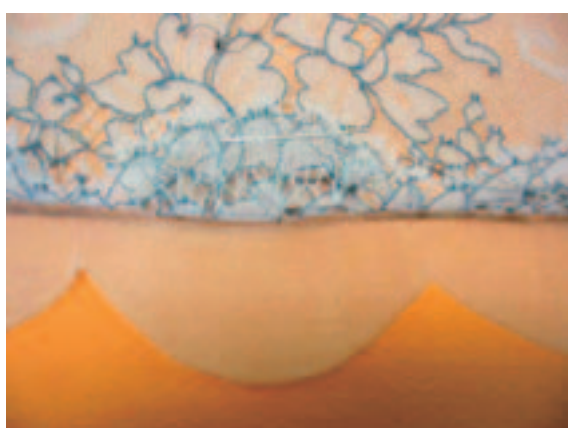


図10 カットされたオーガンジー



図11 型紙をあてアイロンでおる

- ④レースのスカラップに合わせてオーガンジーを止め、オーガンジーの折り山部分をすくってたてまつりでまつる。針目は2～3mm。(図12 13)



図12 ピンうち

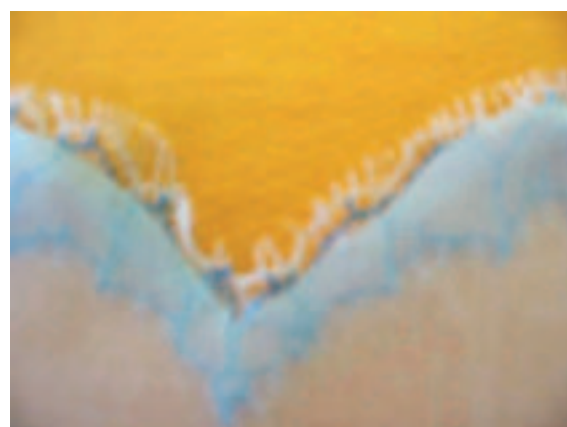


図13 スカラップ完成 (裏面)

iv 柄おこしー切替線

レースをよけ、裏打ちのオーガンジーとアンダードレスを合わせて切替線を縫った後、柄おこしを行う。(図14)



図14 切替線にミシンをかける

- ①レースをドレス本体に沿わせ、レースの余分な部分を確認する (図15 16 17)



図15 ボディに着せ、柄を確認する



図16 レースの余分を確認する



図17 余ったレース

- ②レースのどちらの柄を活かして柄おこしを行うかを見極め、下側になるレースの縫い代をカットする。縫い代が重なるとその部分だけ色が濃くなるので、縫い代は5ミリ以下にする。基本的には中心側、前側のレースの柄を活かすように考える。できるだけ縫い目から近いところで始末ができるように考慮し、柄によっては入れ違いにする事もある。(写真18 19 20)



図18 柄を見極める



図19 余分な部分をカットする



図20 カット後

③上になるレースを乗せ、レースの柄に沿って余分な部分をカットし、下側のレースと細かく巻き縫いしていく。針目は1～2mm。(図21 22 23 24 25)



図21 柄を重ねる



図22 柄を重ねた切替線



図23 ピンうち



図24 柄おこし完成

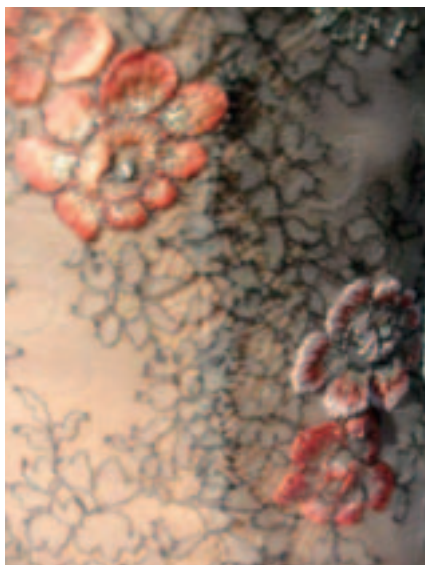


図25 柄おこし完成

v 柄おこしー裾

裾の部分は、身頃部分などで切り落としたスカラップ模様を縫いつけ、スカラップ模様と同じように始末するのが一般的であるが、今回レース生地用の尺がぎりぎりであったため、スカラップ模様を使用して始末する事ができなかった。そのため、レース柄の端切れを利用して裾の柄おこしを行った。

土台のチュール部分だけでは、裾の始末ができないため、柄の不足している部分に全体のバランスを考慮して柄を足す。裾端の部分はスカラップと同様にオーガンジーを控えてまつる。(図26 27 28)

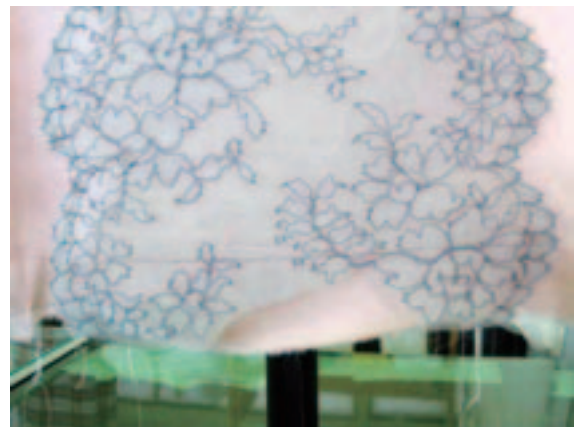


図26 中心部分に柄が足りない。



図27 レース柄の端切れで、裾線の柄をつなげる



図28 左右のバランスを見て、柄を足す

Ⅳ 結果・考察

上記のような制作手順で、図29にあるカクテルドレスを制作した。



図29 作品完成

柄おこしのテクニックを使用する事により、ドレスの切替線を目立たせることなく、思う通りのシルエットを作る事ができる事が確認できた。オーガンジーなど透ける生地において縫い代の存在が明確であると、往々にして作品全体の印象を損ねる可能性があるため、できうる限り細くして始末するのが一般的である。繊細なレースの場合、切替線を意識させるような縫製は致命的欠陥であることは容易に理解できる。柄を利用して縫い代を目立たせなくすることにより、さらにレースの持つ印象を強調することができると思われる。

柄おこしのテクニックは、確かに時間も手間もかかり、現代社会のスピードや効率・経済性などから考えると、やや時代遅れの感があることは否めない。しかし、制作者がイメージする作品の完成度を上げるためには、このような技術を修得する必要があるのではないかと考える。芸術的であると評価されるオートクチュールの作品も、このような地道な技術の積み重ねがあってこそ、完成されて行くのでは無いだろうか。

Ⅴ まとめ

レース生地を使用した作品は過去に何回か製作した経験があったが、ケミカル・レースのように割合縫製しやすいレースを使用したことが多かった。今回柄お

こしのテクニックを習得するため、特に繊細で柔らかなレースを使用して制作を行った。その結果、デザイン・色の組み合わせ・素材感などを、総合的に組み合わせる事により、制作者が意図するレースのイメージ「繊細・優雅、清楚でありながらコケティッシュなイメージ」を的確に表現した作品を制作することができ、満足する結果を得る事ができた。

「柄おこし」の基本的な縫製テクニックとしては、今まで習得してきたテクニックと大きく変わる部分はなかったが、細部の始末の仕方などに、知識を得る事が多かった。

また、今回製作者のイメージをさらに明確にするために、レースにアンダードレスと同系色の日本刺繍糸などを使用して刺繍を加えたため、レースの裏打ち布にオーガンジーを使用した。チュールやシフォンなど張りや透け感などの条件の違う素材を使用することにより、レースのしなやかさや色の雰囲気などが大きく変わる事が十分予想できる。その結果、同じレースを用いて制作を行っても、雰囲気が全く異なった作品を制作する事が可能であり、デザイン・素材・テクニックとパターンとの関係については、今後さまざまな条件の変化による差の比較等も、研究課題として取り上げて行きたい。

また、今回の制作を通して、制作者が思い描くようなシルエットを得るためには、土台になるべき部分の作業が重要である事を再確認した。表面に見える部分より、シルエットを出すための裏側のテクニックにポイントをおいた研究など、今後も研究を進めて行きたい。

最後にクチュールテクニックの指導をいただいた藤屋聡子氏とアトリエパイエットの矢倉道子氏に深く感謝いたします。

註

- 1 安部智子 「製図に描かれない服飾造形の研究ーフリルによる造形Ⅰー」『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部 紀要』第2号 2003
- 2 「柄おこし」とは、レース生地を縫製する時に、まるで一枚の布地でできているかのように、レースの柄を利用して手縫いにより縫製するテクニック。
- 3 「フランスアート刺繍」とは、主に「オートクチュール」メゾンのドレスのために培われた技術で、より自由な発想で発達してきた芸術的な刺繍。宮廷・貴族が華やかであった時代に盛んに生み出された豪華なドレス、軍服などの刺繍に始まり、特定の上流階級の人だけが楽しんでいた「オートクチュール」の衣装のために、常に新しいデザインや技術、

材料が考案されてきた。(Atelier Paillettes ホーム
ページより引用 <http://www.paillettes-jp.com>)

参考文献

- 田中千代 『新・田中千代服飾辞典』 同文書院 1993
細野 久 『高級技術 マテリアル・デザイン・裁縫
〈細野仕立てのすべて〉』文化服装学院 1968
富樫慧子 「レースの美学ー服飾手芸に関する試論ー」
「文化女子大学研究紀要」第6集 1975